



Title	Language; History and Otherness : D on DeLillo's Imaginary Americ
Author(s)	川村, 亜樹
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58782
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	川村 亜樹
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第46号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	Language, History and Otherness : Don DeLillo's Imaginary America
論文審査委員	主査 教授 渡邊 克昭 副査 教授 高橋 明 副査 教授 貴志 雅之 副査 助教授 石割 隆喜 副査 大阪大学教授 木村 茂雄

論文の内容要旨

従来のデリーロ研究では、ポストモダンをキーワードとして、現代のアメリカ文化が中心に論じられてきたが、デリーロの言語観や歴史観における他者性、そして個々の作品における人種的
他者については等閑視されてきた。しかし、デリーロの小説が描いてきた、グローバリゼーションにおける未来指向の帝國的システムが孕む差異や他者に関しては、9・11以後特に論議を呼んでいる。こうした点を踏まえ、本論では、ポストコロニアルを視野に入れ、アメリカ的自己と
(人種的)他者との関係の分析を通してデリーロの言語観や歴史観を炙り出し、デリーロ文学を
アメリカの枠を超えたグローバルな視点から捉えることを試みる。

第1章 『ホワイト・ノイズ』におけるアメリカ的主体の死と多国籍なハイブリッド性

本作品をポストコロニアルな視点から検討し、ハイブリッド性の概念、及び、多国籍でハイブリッドな他者によってもたらされるアメリカ的主体の死を考察する。消費主義、マス・メディア、ハイ・テクノロジーといったものにより産み出された未来指向のシステムに従属するアメリカ的
主体は、歴史から隔離され自立した不死の空間を反復的に欲望する。しかし、グラドニー家のリゾーム的家系に現れる他者たち、空媒毒物事故における他者なる黒雲、ドクター・チャクラヴァーティ、多国籍企業のエージェントである「ミスター・グレー」ことウィリー・ミンクといった他者たちは、アメリカ的主体に他者なる死を突き付け、身体性や時間性を存続させる。そして、ジャック・グラドニーとミンクとの決闘とその後のスーパーマーケットでのラストシーンは、グローバリゼーションの内部において、アメリカが差異や他者のせめぎあう歴史性を伴ったハイブリッドな空間であることを示している。

第2章 『リブラ』における JFK 暗殺とキューバ

JFK 暗殺を描いた歴史小説である本作品における他者、特にキューバの存在に着目し、他者の視点からアメリカの国家的神話を書き換える意義を示したい。これまで批評家の間では、アメリカとソ連の間を揺れ動くリー・ハーヴェイ・オズワルドの矛盾する主体や、ニコラス・ブランチによる未完の歴史編纂が議論されてきた。こうした点を踏まえ本章では、小説が想像力によって、先行する支配的言説とは異なる角度から歴史的事件を語り直すプロセスにおいて、新たな他者が現れることを明らかにする。CIA と関係する亡命キューバ人たちや、国家的イデオロギーと多国籍資本がせめぎあう場として火を放たれるさとうきび畑の声無き労働者のように、他者としてのキューバ人たちは直接的にも間接的にもアメリカと繋がっており、その結果、国家が身体性や時間性を帯びて変容することになる。また、国家間を浮遊する他者として振る舞うリー・オズワルドが、キューバへの入国を拒否され JFK 暗殺を実行した後、愛国主義者ジャック・ルービーに殺害される点においても、国家とその他者との関係が露呈する。そして、リー・オズワルドと暗殺に関する、ブランチの歴史編纂とは対照的な、マーガリート・オズワルドの分裂的語りは、アメリカの国家的神話やメディアによるその表象を内部から崩しつつ再構築する。

第3章 『マオⅡ』におけるマス・メディアと中東

グローバルなマス・メディアと中東との関係を、グローバルな写真家でありながら個人を尊重するというブリタ・ニルソンの矛盾した立場と、ビル・グレイによるベイルートへの旅の意義を踏まえて検討する。本作品における中東に関しては、「ラシュディ事件」を含めて、「作家とテロリスト」や、「デリーロによる「第三世界」の表象」といったテーマで論じられてきたものの、グローバルなメディアとの関係性のなかでの議論はほとんどなされてこなかった。しかし実際には、アラファトはカメラを意識し、ホメイニの葬儀シーンでは永遠なる師を求める群衆とグローバルなメディアが交錯する。また、アブ・ラシッドはベイルートに潜伏するテロリストでありながら、海外メディアの取材を受ける。結果として、カリスマ的指導者たちはグローバルなメディアに組み込まれると同時にそれに完全に支配されない緊張した状況を産み出しつつも、グローバルなメディアと想像の共同体の支配的言説による中東の公認イメージを反復してしまっている。このような彼らとは異なり、ラストシーンでのベイルートの市民は、冷戦終結の年の「第三世界」において、そうしたイメージの裂け目から現れるオルタナティブな中東の歴史を可視化する。だがその一方で、作品最後のカメラの光によって、グローバルなメディア表象と「第三世界」の他者たちのせめぎあいは存続することになる。

第4章 『アンダーワールド』における冷戦、グローバリゼーション、ブロンクス

20世紀後半のアメリカ史を描いたとされる本作品を、グローバリゼーションと人種的他者の視点から分析する。プロローグにおいてアフリカ系アメリカ人の少年コッター・マーティンが歴史的な野球の試合でホームランボールを掴んだ冷戦の時代においては、アメリカ的自己と人種的他者の境界線は明確であるが、ヒスパニック系グラフィティ・アーティストのイスミアル・ムニョスがブロンクスで活動するグローバリゼーションの時代においてはその境界性は曖昧となる。アメリカ史を掘り下げる語りは、エッセイ「歴史の力」においてデリーロの言う、確立された歴史を異なるヴァージョンによって語り直し新たな他者と向かい合う「カウンターヒストリー」の力を明示し、廃棄物をリサイクルする芸術活動を通してカウンターナラティブな要素が描かれている。生涯独身を通し執拗なまでに清潔な状態を保とうとするJ. エドガー・フーヴァーとシスター・アルマ・エドガーは、冷戦の時代に超越的な秩序を求めるが、イスミアルは二人のエドガーたちを超越的空間から現実へと引き込み、死後二人はサイバースペースに回収され繋がる。イスミアルはホモセクシャルな行為によってフーヴァーの性的妄想を具現化し、また、殺害されたエスメラルダ・ロペスを幻想的に浮かび上がらせることで、シスター・エドガーはラテックスの手袋をはずして、エイズの罹患の疑いが持たれるイスミアルを抱きしめる。さらに、彼は彼の芸術が画商によってマーケットに組み込まれない一方で、ビジネスを行うためグローバルなマーケットに積極的に参加しようとする。このように彼は、グローバルな繋がりを占有する、多国籍でハイブリッドな他者を体現しており、ニック・シェイが社会的他者であった青年期にブロンクスで感じた、可変的な時間性を帯びたプロセスとしての現実を引き継ぐことになる。

第5章 『ボディ・アーティスト』におけるハイブリッドな他者への帝国的欲望

『アンダーワールド』が「カウンターヒストリー」だけでなく、言語そのものをテーマとして描いていることを踏まえ、歴史的コンテクストを削ぎ落とした『ボディ・アーティスト』での、人間の身体における言語の政治学を検討する。ボディ・アーティスト、ローレン・ハートケは、自らの個別性を消し去り透明なメディア的身体を構築することで死を超越しようとする。そして、夫レイ・ローブルスの自殺後、突如姿を現して、時間・空間・性の境界線をラディカルに揺さぶるハイブリッドな他者「ミスター・タトル」を支配しようとする。しかし、彼らの対話における言語は支配する側とされる側の関係を転覆させる場面もあり、自己と他者の境界線を不安定にする。彼女の透明なメディアとしての帝国的欲望が最高潮に達する一人芝居『ボディ・タイム』では、彼女の身体に他者なる人物が次々に現れるが、ラストシーンの現実の世界においては最終的に彼女は「ミスター・タトル」と一体化せず、自己の個別的な身体そして歴史を体感する。したがって、本作品において言語は、その使用において世界を構築すると同時に内部から亀裂を生じ

させ、そのようなプロセスにおける自己と他者のせめぎあいは身体性や時間性を喚起する。

第6章 『コズモポリス』における帝國的未來とテロリズム

本作品における9・11の衝撃の痕跡を探るとともに、グローバルな視点でテロリズムの時代における言語の力について検討する。エリック・パッカーは、世界を植民地化できる程のサイバー・キャピタルを操るアメリカ的未來の象徴でありながら、子供の頃父に連れられていったさびれた床屋へ向かう。そして、白く輝くリムジンでのマンハッタン横断の一日を通して、帝國的權力を喪失し、救いとしての痛みと悪臭を放つネズミのような死を受け入れる。こうした彼のマゾヒスティックな行動は、グローバリゼーションのなかでアメリカが目指してきた帝國的未來の自壊を示し、その結果、アメリカ的主体としての彼は時間性を帯びた自己の身体の感覺を獲得する。そして、そうした帝國的未來の崩壊を引き起こすのはグローバリゼーションにおける非対称性や曖昧性、つまり、グローバリゼーションが産み出す、差異と他者がせめぎあう多国籍なハイブリッド性によるものである。特に、エリックにとっての他者ベノ・レヴィンはエリック殺害後、自己の心境を言い表すことができないと言うが、この発言こそ9・11の衝撃の痕跡であり、このような事件の語り直しにおいて本作品は言語によって歴史を取り戻そうとしている。

結論として、デリーロの描くアメリカは、現代アメリカの社会や文化を投影すると同時に、グローバリゼーションの内部においてアメリカが目指してきた帝國的未來が多国籍でハイブリッドな他者と向き合う闘争の場であることを示している。微かな人種的差異を保持したハイブリッドな他者は、帝國的システムに組み込まれると同時にそのシステムを占有し (appropriate)、内部から不安定にする。このような点において、デリーロの小説におけるグローバリゼーションは未來的ヴィジョンへと向かう一方で、絶え間なく差異と他者を産み出し、そうした帝國的未來と他者との交渉や闘争によって歴史は存続することになる。

デリーロの言語は、世界を構築する道具でありながらも、透明な媒体になることに抵抗して、現実のそして文化の翻訳不可能性を提示することで、文化の差異を特定する分断やハイブリッド性のアンビヴァレントな時間性を帯びたプロセスを産み出す。また、支配的言説を内部から揺さぶるといっても、単なる記号の戯れといったものでもなく、歴史を語り直し、新たな他者と向き合い、時間性を帯びた自己の身体を存続させるように、現代の文学・文化理論の再考の場を提供する。そして、このような言語によってポスト帝國的未來を語ろうとする点において、彼の作品はアメリカの枠を超えて、地域性を踏まえつつ現代のグローバルな社会を考える契機を我々に与えてくれるのである。

論文審査の結果の要旨

本博士号請求論文“Language, History and Otherness: Don DeLillo’s Imaginary America”は、現代アメリカ作家、ドン・デリーロ研究において従来ほとんど顧みられることのなかったポストコロニアル的視座に立脚し、彼の後期テキストを彩るトランスナショナルでハイブリッドな他者が、いかにグローバリゼーションにおいてアメリカが目指してきた帝國的システムに組み込まれつつもそのシステムを逆に占有し、内部からアメリカ的主体を揺さぶる交渉の場を提供しているかを、最先端の文学・文化研究の方法論に依拠しつつ、綿密に論証した野心的な論考である。他者との接触において、透明な未来的ヴィジョンを指向するグローバリゼーションの内部にいかにして差異が生じ、そこから身体性や時間性を孕んだ生きられた歴史がどのようにして蘇るかを、言語の政治学と絡めながら鮮やかに浮き彫りにしており、その試みは、緻密なテキストの読みに裏打ちされた各章の議論を経て、説得力のある結論に結実している。

本論文は、序章と結論を含めて、8章から成り立っている。

各章の構成は以下の通り。

Introduction

Chapter 1. Death of American Subject and Transnational Hybridity in *White Noise*

Chapter 2. The JFK Assassination and Cuba in *Libra*

Chapter 3. Mass Media and the Middle East in *Mao II*

Chapter 4. The Cold War, Globalization, and the Bronx in *Underworld*

Chapter 5. Imperial Desire for Hybrid Other in *The Body Artist*

Chapter 6. Imperial Future and Terrorism in *Cosmopolis*

Conclusion

Notes

Works Cited

序章では、先行研究と最近の批評動向を十分に踏まえた上で、9・11以降、特に議論が喚起されてきた、デリーロ文学に描かれたグローバリゼーションにおける未来指向の帝國的システムが孕む差異や他者に関する、本論文の基調をなす議論がまず提示される。そして、ポストコロニアル的視座から、アメリカ的主体と他者との関係の分析を通して彼の言語観や歴史観を炙り出すことにより、グローバルな視点からデリーロ文学の定位を試みるという、本論文の射程と意義を明確に示している。それを基にして、ハイブリッドな他者とグローバリゼーションとの間の交渉やせめぎあいの、時間性を帯びたプロセスを、各章においてどのようなかたちで焦点化していくか、その見取り図を予め提示している。

第1章では、デリーロの代表作『ホワイト・ノイズ』を、ポストコロニアルな視点から読み解き、未来指向のシステムに従属するアメリカ的主体が、歴史から隔離された不死の空間を反復的に欲望しつつも、トランスナショナルなハイブリッド性を帯びた他者と接触することによって死と接合され、身体性や時間性を伴う混濁したハイブリッドな領域において、いかに生を取り戻すか、あるいはシステムに再回収されてしまうかが論

じられている。グラドニー家のリゾーム的家系に現れる他者たち、空媒毒物事故における他者なる黒雲、ドクター・チャクラヴァーティ、多国籍企業のエージェントである「ミスター・グレー」ことウイリー・ミンクといったトランスナショナルな他者が、アメリカナイズーションに従属する一方で、内側からそれを脱構築し、アメリカを他者のせめぎあう歴史性を伴ったハイブリッドな空間にしているという指摘は説得力に富み、本博士論文全体の方向性を明確に打ち出している。

次いで、デリーロのベストセラー『リブラ』を論じた第2章では、キューバを前景化し、JFK暗殺と他者の視点から、アメリカの国家的神話の書き換えについて議論を展開している。亡命キューバ人たちや、国家的イデオロギーと多国籍資本がせめぎあう場として火を放たれるさとうきび畑の声なき労働者などマイナーな登場人物に着目し、先行する支配的言説とは異なる角度から歴史的事件を語り直すプロセスにおいて、新たな他者が現れることを明らかにしようと試みている。この議論は創見に富むが、国家間を浮遊する他者としてのリー・ハーヴェイ・オズワルドにもっと紙幅を費やし、ポストコロニアル的観点から、彼に議論を集約して論を展開することも可能だったのではあるまいか。とは言え、歴史編纂に行き詰まるブランチとは対照的なマーガリートの分裂的語り、アメリカの国家的神話やメディアによる表象を内部から崩しつつ再構築するという指摘は傾聴に値する。

第3章では、『マオⅡ』を取り上げ、グローバルなマス・メディアと中東との関係を、ビル・グレイによるペイルートへの旅の意義を踏まえて検討している。従来の批評の枠組みを大きく組み替え、「第三世界」のカリスマ的指導者たちがグローバルなメディアに組み込まれると同時に、それに完全に支配されない緊張した状況を産み出しつつも、支配的言説による中東の公認イメージを反復してしまっているという主張は、ポストコロニアル理論に的確に裏打ちされており、一定の説得力をもつ。「群衆」に対するアンビヴァレントな感情や、黙示録的・終末論的なヴィジョンや、カレンの扱いに関しては、若干議論の余地が残るが、ラストシーンにおける、イメージの裂け目から可視化されるオルタナティブな中東の歴史、並びにグローバルなメディア表象と「第三世界」の他者のせめぎあいに関する分析は、緻密なテキストの読みを感じさせる。

『アンダーワールド』における冷戦、グローバリゼーション、ブロンクスと題された第4章では、20世紀後半のアメリカ史を射程に入れたデリーロの大作が、「カウンターヒストリー」をキーワードとして、人種的他者の視点から分析されている。プロローグにおいて、アフリカ系アメリカ人の少年コッター・マーティンが、歴史的な野球の試合でホームランボールを掴んだ冷戦開始時においては、人種的他者の境界線は明確であるが、ヒスパニック系グラフィティ・アーティストのイスミアル・ムニョスがブロンクスで活動するグローバリゼーションの時代においてはその境界性は曖昧となるという主張は、冷戦時代に超越的な秩序を希求したエドガー・フーヴァーとシスター・エドガーの二人に対する、イスミアルの営為を論じる際、有効な議論の枠組みを提供している。市場に組み込まれないにもかかわらず、グローバルな市場に積極的に参加しようとするイスミアルが、グローバルな繋がりを占有する、トランスナショナルでハイブリッドな他者を体現しているという主張は、本論文全体の文脈においても妥当性をもつ。

『ボディ・アーティスト』におけるハイブリッドな他者への帝國的欲望を論じた第5章では、前章とは異なった角度から、歴史的コンテクストを削ぎ落とし逆説的に人間の

身体性を浮き彫りにしたデリーロの言語の政治学を、周到なテキスト分析を通じて鮮やかに浮き彫りにすることに成功している。透明なメディア的身体を構築することで死を超越しようとするボディ・アーティスト、ローレン・ハートケが、時間、空間、性の境界線をラディカルに揺さぶるハイブリッドな他者「ミスター・タトル」と遭遇し、帝国的欲望を抱きつつ支配しようとするものの、自己と他者の境界線を不安定にする不可解な言語を通じて支配、被支配の関係が転覆していくプロセスが丹念に論じられている。一人芝居『ボディ・タイム』を経て、彼女が身体を通じて歴史を体感するラストシーンを分析することにより、デリーロの言語が、世界を構築すると同時に内部から亀裂を生じさせ、身体性や時間性を喚起するという魅力的な結論を導き出している。

『コズモポリス』における帝国的未来とテロリズムと題された最終章は、本論文を締め括るに相応しい重厚さを備えている。瞬時にして世界を植民地化するサイバー・キャピタルを操り、アメリカ的未来の象徴とも言うべきエリック・パッカーのマゾヒスティックなマンハッタン横断の一日を辿ることにより、いかに彼が、帝国的未来の自壊を示し、生きられた身体や時間を獲得するかを緻密に論証している。グローバリゼーションにおける非対称性や曖昧性、換言すればグローバリゼーションが産み出す、帝国的未来とは逆の、差異に彩られ他者がせめぎあうトランスナショナルなハイブリッド性こそが、帝国的未来の崩壊を引き起こすという結論は、9・11の痕跡を語り直し、検証するという意味においても、有意義な論点を提起している。

結論部において本論文は、デリーロの描くアメリカが、グローバリゼーションの内部にトランスナショナルでハイブリッドな他者と向き合う交渉や闘争の場を内包し、絶え間なく産み出される差異を通じて、身体性を孕んだ生きられた歴史性を取り戻しているという結論を導き出す。その際、透明な媒体になることに抵抗するデリーロの言語が、文化の翻訳不可能性を提示しつつ、グローバルな意識に裂け目を生じさせることによって歴史を語り直し、現代文学・文化理論の再考の場を提供するという考察は、デリーロ研究からサルマン・ルシュディ研究へと大胆に架橋を試みる論者の今後の研究の展望に有効な視座を提供するものである。

以上概観してきたように、ポストコロニアル理論には様々な立場が含まれるが、最新の文学・文化研究の成果を幅広く吸収した本論文は、特にホーミ・バーバとガヤトリ・スピヴァックの理論に負うところが大きい。理論とテキスト分析のバランスがよく図られた本論文は、これらの理論を単に公式的に適用するのではなく、これらの理論家のもっとも中核的な部分（バーバにおける「境界」や「ハイブリッド性」の概念、スピヴァックが提起した「サバルタンの表象」の問題など）を十分に咀嚼し、自分のものとした上で、それをテキスト分析に柔軟に活用している点でも、デリーロ研究における類のない学際的業績として高く評価することができる。

また、ポストコロニアル的視点とグローバリゼーション状況との接続という本論文の試みも注目に値する。この課題は、現在のポストコロニアル理論における最も重要な課題のひとつと言える。本論文の場合、これはおもに、ハート/ネグリの『帝国』を理論的な支えとして進められているが、このような補助線を引くことにより、「ポストコロニアル」は、アメリカという「帝国」自身にも内在し、その一枚岩的な支配体制を内破させる「超国籍的でハイブリッドな他者」として捉えられることになる。つまり、「支配者」と「被支配者」とが、古典的なポストコロニアル理論で描写されてきたような「内

と「外」の明確な境界を失い、同じ時間と場所、場合によっては一人の人間の中に内在するグローバリゼーション下の状況が巧みに捉えられていると言える。

審議の過程において、学問的立場から石割委員より異論が提示されたが、他の四人の審査委員は、本論文が、論全体の独創的な枠組みと各論の展開、並びに検証の綿密さにおいて相応の水準に十分到達した好論文であると判断した。その際の審査委員の議論を踏まえ、今後の課題として、建設的な立場から、次のことを指摘しておきたい。まず、「ポストコロニアル」から「グローバル」への転換というマクロ的な視座に立った結果、「ポストコロニアルな他者」と「ハイブリッドな他者」との区分けが曖昧になり、「他者」と「帝国」や「群衆」との関係が必ずしも十分に描き切れていないのではないか。また、批評や理論の引用並びに論述の方法において、一層踏み込んだ論考の肉付けを要する箇所が見られるのではないか。さらに論証の過程で、「第三世界」に対する論者の理想主義がときおり表出し、議論の妨げになりかねない点に関しては、今後の研鑽を期待したい。

しかしながら、これらの課題は、野心的なグランドデザインに基づき完成された本論文の射程の大きさと表裏一体をなしていることもまた事実であり、本論文の学術的意義を減じるものではない。大部のテキストと膨大な批評理論の文献を読みこなし、最新の方法論に依拠しつつ、新機軸を打ち出した本論文が、学術性と独創性に富む論考であることは、既に本論文の数章が、審査を経て日本英文学会、日本アメリカ文学会の全国大会等において口頭発表され、学会機関誌『関西アメリカ文学』等にも掲載されたことが何よりもその証左となっている。

専らポストモダン・アメリカ文学のコンテキストで論じられることの多かったデリーロのテキストを、理論的な枠組みとして一貫してポストコロニアル的視点から解読した本論の試みは、斬新かつ独創的な方法論で新領域を切り拓く雄大な構想と創見に満ちた論理構築において、多大の学術的貢献を果すものである。カルチュラルスタディーズの成果を十分に取り入れつつ、デリーロのテキストの緻密な読み直しを通じて、彼の文学を従来のアメリカ文学のキャンノンとは別の批評的コンテキストに定位しようとする本研究は、デリーロ研究のあり方を根源的に問い直しているのみならず、現代アメリカ文学研究のパラダイム転換を果敢に模索する論考として高く評価できる。

これらを総合的に判断し、本審査委員会は、本博士号請求論文が、博士(言語文化学)の称号を与えるのに相応しい業績であるとの結論に達した。